令和８年度　第２回　大津市社会教育委員会議　議事録（概要）

□　日　時
　令和８年８月 24 日（月）14 時 00 分～16 時 50 分

□　場　所
　大津市役所　本館４階　第３委員会室

□　出席者
　社会教育委員　12 名
　教育委員会事務局９名（教育部長　ほか８名）

□　傍聴者
　なし

□　内　容
　1　開会
　2　教育長挨拶
　3　委員自己紹介
　4　会長、副会長専任
　5　会長、副会長就任挨拶
　6　議事
　　（1）　令和８年度大津市社会教育推進事業補助金交付に係る意見聴取
　　（2）　次期大津市生涯学習推進計画の骨子について
　　（3）　大津市子ども読書活動推進計画（第五次）の骨子に係る意見聴取
　7　その他
　8　閉会

□　主な質疑・意見等

（１）令和８年度大津市社会教育推進事業補助金交付に係る意見聴取

※資料に基づき事務局より説明

【委員】
　資料を見たが、補助金の交付対象が規模の大きい団体が多い。今回の申請内容自体は良いと思うが、その他に申請できる団体はあるのかと疑問に思う。
　また、この補助金の存在は、交付対象となる団体に周知されているのか。仕組みとしてあるのに使える団体が減っているのではないか。以上の２点について教えてほしい。

【事務局】
　１点目の、補助金を利用できる団体があるのかについては、交付先の固定化が進んでい

る。交付に当たっては、団体の会員数が上限額の基準となる。昨今、団体の会員数が減る中で補助金の交付額も減っており、申請事務負担を考えると団体にとって申請しづらくなっているように感じている。今後に向けて、補助金のあり方の検討が必要だと考えている。2 点目の、補助金の周知については、社会教育関係団体や単位 PTA に対して、直接あるいは学校園を通じて周知をしている。その他の団体に対しては、広報おおつや市ホームページによる周知を行ってはいるが不十分なところがあり、有効な方法を検討したい。

【委員】
　私の学区では PTA もなくなってしまっているが、そうした学校に対する通知や周知も検討しているのか。

【事務局】
　学校を通じて周知している。

【会長】
　ＰＴＡが保護者会などに変わっても、そのあたりの関わり方は PTA 時代と変わらないと事務局は認識しているということか。

【事務局】
　そうである。

【委員】
　学校運営協議会などの会議の場で周知すれば、周知のレベル感も違ってくると思う。

【会長】
　補助金の周知をコミュニティスクールにおいて行うのは良い方法。
　人口減少社会の現状を見ると、何か単位等によって交付額を決める基準は変えていく必要があるのではないか。会員数が減り補助金額が下がる一方で、物価高もあり事業費そのものは上昇している。会員数の減少と事業費の上昇を考えると、会員数に基づく社会教育一般事業補助金の上限額は、見直しが必要だと思われる。

（２）次期大津市生涯学習推進計画の骨子について

※事務局より資料について説明

【委員】
　生涯学習に関する市民アンケート調査については分析中とのことだが、資料 7 の調査結果報告書（速報版）の 4 ページの回答者属性について聞きたい。3,000 人は人口の配分に応じて抽出されているかと思うが、年代別の回答者数を見ただけでは、人口のボリュームゾーンが多く配布数が多かった世代と、そもそも人口が少なく配布数や回答数が少なかった世代の各々の意見が見えにくい。
　我々は若い世代の声を聴く努力をする必要がある。若い人の声を抽出するアンテナを張るためにも、それぞれの世代の有効回収率がどのぐらいだったのか知りたい。また、若い

世代の回答数が少なければ統計的な分析はできないと思うので、どう分析するかも知りたい。年齢を半分ずつに分けて対比するか、3カテゴリーに分けて傾向をみるかで、クロス集計による結果の見え方や示唆されるものも変わると思う。

【事務局】
　有効回答率は算出可能。有効回答率を掲載すればわかりやすいと思うので取り入れたい。
　ご発言あったように、クロス集計についてもどのように区切るのがベストか試行錯誤していきたいと思う。

【会長】
　財政的な問題もあると思うが、若い世代の意見を聞くためには、返信率が低いことを考慮して送付数を増やすべき。若い世代の回答率が低く、お年寄りの回答率は高い。これらの回答に基づいて施策を進めると、若い世代の意見は聞けない。費用がないので若い世代の回答数は少なくても仕方ないでは済まされない。

【委員】
　資料6のアンケート調査票の質問の内、「学び」「生涯学習」という表現が、問6ではイコールであるかのようだが、それ以降は異なる意味合いで扱われている。「生涯学習」というとハードルの高さを感じるが、「学び」というとAIの普及などもあり身近な印象。言葉一つで回答は大きく変わってくる。冒頭文を読むと、恐らく回答者は「学び」と「生涯学習」はイコールで回答しており、「生涯学習」を狭く捉えたのではないか。それで良いのかというところは今後の問いとして残しておきたい。

【事務局】
　今のご指摘から、明確かつ戦略的に言葉選びをしておくべきであったと感じている。「生涯学習」を狭義の意味でイメージされると意図する回答が得られないと感じ、「学び」という言葉を使った。次回の調査に向けて受け止めたい。

【会長】
　今の委員の発言は、資料5－1の生涯学習推進計画進捗状況総括表の3枚目、柱3のコメント「学習成果の活用についても従来の見方に限定せず」と記載したことに関わる。
　施策としては、講座を受けた人たちが自分たちで学ぶグループを作り、次はその人たちが自分たちで学びの場を作るというのが、この計画が目指す典型的な学習成果の社会への還元。しかし、今の時代はどうなのか。最近140キロを超える球速を投げる高校生が増えているが、そういった選手は指導者からだけでなく、YouTubeで研究しているという。恐らく本人たちはこれを生涯学習とは捉えていないが、これは明らかに生涯学習。幅広く学ぶ機会が広がっていることを考えると、どれだけ学んでいるか、その学びを活かしているのかを聞いた上で、その内行政等によるものの比重がどれくらいかも調べる必要があるのではないか。

【委員】
　前回の社会教育委員コメントでは「固定化」が課題であると述べられているが、今回の計画概要ではどのあたりでそれが示唆されるのか。

【事務局】
　「固定化」というのは、利用団体の固定化、年齢層の固定化のこと。若い世代にも届くような周知や情報の提供が必要であるとは感じているが、アンケート結果から、多忙化により生涯学習ができていないということを踏まえると、色々な種類の学びを提供し、年齢層を広げていくと良いと考えている。資料８の計画の目標・基本方針(案)の基本方針３「つづける」の施策３「多様な手段による学習情報の発信」で示している。

【会長】
　具体的には、団体等の新陳代謝がうまくいっていないということ。先ほどの委員の話にもあったが、若い人がアンケートに回答していない状況で、ニーズに応えられているのかという課題があると思う。
　学童保育というのは、市の施策上は福祉の範囲にはなるが、中身を見ると様々な活動を地域の子どもたちと行う社会教育の場でもある。そういったことも含めて社会教育を捉えていく必要があるが、学童保育の立場から見ていかがか。

【委員】
　市内２カ所で学童を運営しているが、今夏休みで 70 名ほどの子どもたちが利用している。色々なきっかけを提供するというコンセプトで運営しており、ヨガダンスやジャグリング、英語、お菓子作りなどを定例的に行っている。少なからず社会教育の場に近いものがあると感じているが、実際にそれを地域で開かれた形で継続していきたいと考えたときに課題がある。
　先ほど、固定化という話があったが、例えば会議室などを借りに行くと既に固定化された団体があるため、時間帯によっては新しい団体は借りられない。
　また、小学校の体育館を借りて月に１回ジャグリングをしているが、地域に開放した時には多くの参加があった。私たちのような団体と学校や県立の美術館などの社会教育施設をつなぎ、プランニングする人がいると良いなと思う。

【会長】
　既に活動している団体も一生懸命活動しているので、優先順位を付けるのは難しい。この使い方も含めて、地域学校協働活動として公民館の利用方法や学校施設の開放を具体的に検討できないか。役所や地域の中に、そういったつながりをつくることができる、「越境する」人材を育てていくことが必要。

【委員】
　先ほど学童の話が出たが、現状を知りどう改善できるのかを考え、話し合う機会を持つことが重要。子どもに色々な体験をさせたいという気持ちはありつつも、命を預かっているという重みを考えるとできないこともある。学校や公はそのことも頭に入れて施策を考える必要がある。

このアンケートについても、なぜアンケートを取るのかを頭に入れておきたい。

【委員】
認識の話になるが、社会教育施設というのは公民館のことか。

【事務局】
公民館だけでなく、図書館や博物館なども含めて社会教育施設と理解している。

【委員】
今、大津市ではコミュニティセンター条例により支所から公民館機能を外しつつある。コミセンでは融通が利いても公民館ではできないこともあり、市民部と教育委員会では、そのあたりが違うのかと思う。私の学区は、公民館はなくなりコミセン化した。児童クラブなども夏休みは教室が足りず、市民センターを使うなどしている。学区では子どもが急激に増えているが、学校運営協議会などの場で要望することで、校長先生の協力もあり、学校の体育館なども利用できる。各種団体が集まって話し合う時も、学校が中心になってくれている。
先ほど美術館に行くという話もあったが、各団体が互いにコミュニケーションを取れば知恵を出し協力できる。大津市ではそういったところの壁があり、打開できていないと感じる。教育委員会としても、市民と声を掛け合わないと学びの場はできない。情報の発信を庁内や地域に向けていってほしい。

【委員】
生涯学習というと、日ごろからすでに学んでいる学生よりも、子育て世代やそれ以上の世代が学んでいくところを重点的に整備していく必要があると私は考える。
また、私は協力者として学校の事業に参加しているが、その底上げ、人材づくりというところを計画でも考えていく必要がある。

【会長】
資料５－１の３枚目の最後であるが、「地域学校協働活動の推進に資する講座の開発や、学校司書の補完的な役割を果たしてもらえる人材の育成など、学校現場のニーズに合致したボランティアの育成の戦略的展開など工夫の余地はある」と書いた。読書推進もそうだが、子どもに対する分野は予算がつきやすい一方で、体験づくりやコミュニティづくりにつながる戦略を考えた方が良いということも含めた話として書いた。子どもらは学校でも学んではいるものの、プラスの体験の格差をどう是正していくのかは大事な話。
先ほどの委員の発言については、固定化などと言いつつも、地域にいる高齢者のうち、そこに行っている人は少ないという問題もあり、そのあたりも含めて、どのように拡大していくのかが課題であるとの意見であったと受け止めた。

【委員】
先ほど固定化の話が出ていたが、人権講座や地域の人権集会をしても出席するのは同じ人ばかり。人権意識が高い人は益々高くなるが、参加しほしい人は興味を示さないことが多い。今後その固定化を崩すには、子どもを引き合いにしていく必要があると考える。子

どもから大人に向けてどんどん発信をさせないと、固定観念が崩れていかない。人権関係のことについても、親子で参加できるような事業にする必要があると考えているが、現状、親を引っ張り出すのは難しく、悩んでいるところである。

【委員】
地域の市民センターで活動している団体が、発表という形で幼稚園に歌いに来てくださる機会などを作っている。子どもたちにとっては、綺麗な声で歌ってくれる地域の方々が園を訪れることで、刺激をもらい、豊かな経験をする機会となっている。来られるコーラスの方々も、いつもと違う経験ができて楽しいと言われている。園での発表の機会の創設は、団体に対してできることの１つかと思う。

【委員】
今回、若者からの回答が少ないとのことであるが、アンケート調査票を見ると、回答に時間がかかるなと思った。もっとシンプルに答えられて、フォームへのアクセスも直接アクションが起こせると答えやすい。
私は学校施設の開放にも関わっていたが、市として施設の使用には二つのくくりがあり、一つはスポ少やママさんバレーなどの学校開放、もう一つは卒業生や地域団体による目的外使用。民間の学童保育はどちらに該当するか、教育委員会が判断することであるが、学校としては戸惑うところがある。熱中症や怪我などのハードルについても考えてしまう。
また、地域のニーズと埋もれている人材の発掘についてだが、学校での読書活動の推進に当たり、公民館に読書サークルを紹介してもらいアポを取ったことがある。読み聞かせボランティアや学校司書のような人材をデータバンク化して、学校がアクセスできれば嬉しい。学校に限らず市民もアクセスできるサイトやシステムを構築できれば良い。

【委員】
自身の活動の中で、フードドライブを行っている。食品ロスになる品物の提供を受けてそれを必要な人に届けている。中には生活が厳しく家族丸ごと支援が必要な家庭もある。
支援を必要とする人に、どのように生涯学習を勧め、ここにきて良かった、勉強になったと思ってもらえるような場を設定できるかを考えるとき、計画で示す市民とその人たちの置かれた状況との間に少し落差を感じる。
全ての人が大津市民であり、生涯学習は必要であることから、支援を必要とする人たちのために何ができるか考えたい。

【会長】
今のご発言はまさに福祉の課題ではあるが、生活が厳しく支援が必要な方が、どうすれば暮らしが保障されるかを考えるのは、福祉や地域団体の仕事なのだろうか。それらを市民全体で考えても良い課題とするならば、これについて考え学ぶことは社会教育の対象となるはず。目の前にある地域の課題やそこで生きていくためにはどうすればよいか、市民の一人ひとりが考えたり向き合ったりすること、そのための情報収集をするといったことの全てが学びとなる。計画の目標に掲げる「学び」が、広い意味での学びであると考えることが必要。

【委員】
　私も公民館の利用団体の一員である。公民館活動として、子どもを対象に料理教室などを開催されている。迎えに保護者の方が来られた際、コミュニケーションを取ったりして、市民の生活の中に入り込む公民館活動のすばらしさを感じている。公民館を借りる手続きがもっと簡素化されれば、より使いやすくなると思う。

【委員】
　次期計画案を見たときに、基本方針がこれまでと違う形で書かれている。現計画では、柱１、２、３と、その方針に沿う形、また、その内訳として各所属の取り組みに対する個別評価のようなものが書かれている。その評価は恐らく評価指標のようなものだと思うが、現計画と柱が変われば評価も変わる。今ある評価指標を用いて評価に変えていくのか、新たなものを設けるのか。

【事務局】
　各基本方針の下にそれぞれ施策があり、その下にさらに細かいカテゴライズがある。これを庁内各所属に周知して、これから行う事業と紐づけていくというものである。今まで同じように紐づくものもあれば、新しい取組や切り口を変えて紐づくものがあるかと思う。そこに合う指標を改めて捉えながら進めていく予定である。

（３）大津市子ども読書活動推進計画（第五次）の骨子に係る意見聴取

※事務局より資料について説明

【委員】
　この骨子は、乳幼児からスタートしているが、こども家庭庁が進める「はじめの 100 か月」という取組を念頭に置くと、子どもに本を読んでもらうためには、母親のおなかに赤ちゃんができたときから取り組む必要があると思う。
　私は教育委員会と連携して、乳幼児の親子への絵本の読み聞かせをしている。その中で、いつから読ませたら良いか、どう読ませたら良いかわからないという話を聞く。保護者が読み聞かせてもらう体験をしてどんな気持ちになったかを考えることで、子どもに対する実践につながると良い。現在、10 か月健診で読み聞かせをしているが、もっと前から読んでも良い。本の内容は理解できなくても、子どもは親とのコミュニケーションを深めたり、様々な刺激を受けたりすることができる。骨子（案）には、取組対象が子どもと書かれているが、もう一つ前の「家庭」から始まると思う。

【事務局】
　ご指摘の通り、乳幼児期における読み聞かせの重要性は認識しており、例えば、母子手帳交付時、対象者全員に、読み聞かせの仕方やおすすめの絵本を記載したチラシを配っている。

【委員】
　できれば親となる人に、チラシを配るだけではなく誰かから本を１冊読んでもらっても

らいたい。自分が親になったこの時期に、もう一度誰かから読んでもらう経験は効果的かと思う。

【会長】
　今の事務局の話からして、こども家庭庁が言っていることを行政はやっているだろう。法律に基づいて公共政策を行っているのなら、ここからやれることは何かという視点で、目標を見直すことが必要。施策によって、子どもたちやその親をどう変えられるのか。それが基本目標だと思う。かつ、活字に親しんだり、物事を考えたり、耐える力を育くむ必要がある。これは、子どもの人生を変えることでもある。今の学生はタイパコスパ重視ですぐ結果が出るものしか求めない傾向にある。これでは対応力が身に付かない。
　生涯学習推進計画の施策の体系目標で「自分らしく」という表現がある。私は、「自分らしく」は自分の限界を決める言葉だと思っている。今の学生はすぐに「個性」や「自分らしく」と言う傾向があるが、それではイノベーションはできない。「地域らしさ」についても同じ。地域の良さを伸ばすのなら良いが、たいていの場合はやらない理由になる。
　読書に話を戻すと、このタイパコスパ重視の時代に遅延報酬というものがあることに、学校教育も親も気づき理解することが必要。短期的な利益しか求めなくなると国力の低下につながり、一人一人の自分の人生を切り拓く力も弱まる。文部科学省が 20 年前程前に「生きる力」を育む大切さを打ち出したが、それを改めて考えていく必要がある。

【委員】
　先日、うちの地域で親子広場のようなものを開催した際に、図書館職員からおすすめ本紹介の冊子をもらった。この冊子は東京都が作成したもので非常に良い内容だった。これを持って男の子に声を掛けたら好きな本を 10 冊くらい選んで持ってきた。本に触れる良いきっかけになると思うので、大津にも同様の冊子があるのかも知れないが、作って発信すると良い。

【会長】
　おすすめ本の紹介や好きな本について話し合う取組を、小学校 1 年生全クラスでできれば非常に良い。そういった多様な取組を行うときには、学校の先生以外の人材が必要。例えば、少なくとも図書整理のアルバイトを確実に配置することで、子どもたちの本への関心は変わると思う。
　現在、「文学のまち大津」を推進している。民間の研究者などがつくった本や遊び、劇なども文学を活用してつくられているが、これらを幼稚園や保育園、学童などにおいて広範囲に展開する方法を考えていきたい。「文学のまち大津」は市長も含めて前向きに進めているところなので、幼児教育や学校教育でも活かしていきたいところである。

【委員】
　大津市は、やはり学校に司書が少ないと思う。知り合いに読み聞かせで学校に行っている人がいるが、本の整理や修理がボランティアに丸投げになってしまっていると聞く。以前は学校司書がいて、図書館は常に開いており、授業に参加できない子の居場所としての役割も果たしていたとのこと。学校図書館に子どもたちが望む「こうなれば良い」というところを実現してほしい。

また、地域で子ども食堂をしているが、ここでは必ず読み聞かせをしている。集中できない子が集中できるようになるなど、子どもたちに変化が見える。ただ、自分たちが持っている本しかないので、図書館からパッケージで貸し出してもらえるとありがたい。

【会長】
私の同僚が、学生に本を１冊貸して帰らせていた。学生にもう一度本を返しに来させるために貸したという。そのように次につなげていくことも大事だと思う。
ただ、貸し出す場合、返ってこないかもしれないという前提で貸せる自前の本の方が良いかもしれない。

【委員】
孫に読み聞かせをしているが、気に入った同じ本ばかりを読みたがる。図書館では司書が季節感などを大切にしているかと思うが、季節の本に限らずあらゆる本を出しておいてほしい。また、子どもには一つの単語を調べることで前後の言葉についても知ることができるよう、辞書を使ってほしい。そういったことに興味を持つきっかけは絵本だと思う。読むだけでなく、めくる楽しさもある絵本を大事にしたい。

【委員】
私の小学校では、保護者 OB による読書サークルに学校の図書室で活動してもらっている。そのようなボランティアを掘り起こして探す仕組みがあれば良い。また、先ほど話に出たが、絵本紹介のチラシ配布や子ども向けの読み聞かせだけでなく、プレママやプレパパへに対する絵本の読み聞かせ会があれば良いと思う。

【会長】
そういったボランティアの活動支援を公共政策の課題にしていけるかどうかは、地域と自治体の力量次第だと思う。

【委員】
私は、小学校の時に読んだ本を自分にとってのバイブルだと思い、以後ずっと同じ本を持ち続けている。子どもには、心のよりどころとなり自分のあり方を象徴するような本に、幼い時に出会えることの幸せをぜひ感じて欲しい。以前、絵本を取り巻く環境が変わってきているという話を聞いた。実際に昔からある本の表紙がアニメ風イラストに変わっていたり、文字数が減って薄くなったりしている。
絵本には色々な効果があるので、直接子どもに言わなくても、注意したいことを絵本を通して理解してもらうことができる。先ほど発言のあったおすすめ本と同様に、選書に当たり、その本を読むことでどんな気持ちになり、またどんなことが伝えられるか、何かまとめたようなものがあればありがたい。

【会長】
大学生が 1 日 10 分読書をすると、 4 年間で 100 冊本を読むことになるとのこと。中学、高校で行っていた朝読書の習慣が大学生まで続けば、100 冊読めることになる。単位をとっただけの自分と、プラスして 100 冊読んだ自分を比較してどちらの自分が優れてい

ると思うかと学生たちに問うが、読む方を選ぶ人間が減っているのが今の日本の苦しいところだと思う。